

國學院大學學術情報リポジトリ

コメント・討議の記録(要旨)

コメント(平成二十二年度

國學院大學人間開発学会第二回大会公開講演会・シンポジウム日本の伝統文化教育の可能性--人間開発学の基盤構築に向けて) --

(公開シンポジウム日本の伝統文化教育と人間開発学の構築--カリキュラム開発を視野に入れて)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畔上, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001202

[「コメント・討議の記録 (要旨)」]

《コメント》

コメントーター

畔上 直樹 (上越教育大学大学院学校教育研究科准教授)

あぜがみ・なおき 昭和四十四年、東京都生まれ。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学博士(史学)。首都大学東京大学院人文科学研究科助教(東京都立大学人文学部助教兼任)を経て、平成二十二年四月より現職。日本近代史、日本近現代地域社会史専攻。『村の鎮守』と戦前日本―「国家神道」の地域社会史―(単著、有志舎、平成二十一年)、『多摩広域行政史・連携・合併の系譜』(共編著、財団法人東京市町村自治調査会、平成十四年)など、著書、論文多数。



■地域の近現代史研究の立場から

私は上越教育大学の大学院の学校教育研究科の教員をしています。畔上と申します。こういう肩書でありますので、私がいかに「学校教育研究」の専門家のように見えますが、私は、今年の四月に上越教育大学に来たんですけれど、昨年までは八王子の南大沢にある某公立大学で長く仕事をしておりまして、基本的には地域史の近現代史の研究者という自己認識のまま、ほぼそれできてしまったということでありまして。まあ逃げ口上を言っているわけです。

どういふことかという、要するに「教科専門」という問題をですね、自覚的にあまり考えることなくきたんだと、先生方のお話をうかがっているうちに、非常に勉強させていただいたと同時に、「私は夏休みの宿題をやらなままきたんだ」というような非常に焦る気持ちで、「お前は教育大学という場所です。食わせてもらっているんだから、ちゃんとそういう教科専門の中での専門家としてどういふ自覚を持つべきかをちゃんと考えなさい」と諭された気分です。

そういうことですので、私のこれからの発言というのは、報告の先生方、そして櫻井先生の水準でのお話とはとてもできません。私はあくまでも地域近現代史の研究者の目から見て、こういった教科教育、それから「伝統文化」、國學院大學そして皇學館大学の、そういったものに対して何を言えるのか、特に「伝統」という問題ですね、これについて何を言えるのか、ここは悪役に徹するということ(笑)、やっていきたいというふうに思っております。

■地域が違うと・・・がらっと変わっている

それですね、そうはいつてもまったく堅苦しい話からするものなんですので、私が四月に上越教育大学に来てからですね、いろいろカルチャーショックの連続だったというところから話をしたいと思います。

私はどこの生まれかというところと東京の八王子です。前の大学の所在地でもあるんですが、ずっと東京の八王子に住んでいた。なおかつ私が地域史で研究している場所はどこかというところ、和歌山県と岡山県などです。上越からみれば全部「太平洋の側」です。雪があんまり降らない。八王子は東京のなかでも雪の多いことで知られる場所なんですけれども、いずれにしてもその文化風土の中で生きてきた人間です。

そういった人間がですね、初めて上越という「向こう側」の大学に拾っていただき、勤めることになったわけです。また、前の大学は、「一般」の公立大学でありまして、私は歴史系の研究室に所属していたんですね。そうした「教育」は入ってないところから、上越で社会学の先生たちの基盤となる研究をできるような体制になっている、「社会系コース」という教育組織に所属することになりました。ですから私のところのコースの同僚は、私自身は「日本近現代史」の教員として入りましたけれども、ほかにも教科専門だけでも経済学の教員、自然地理学や人文地理学の教員もいるし、それから宗教学や法律学・社会学の教員もいる。まあ面白いわけですね。そういう意味でも、非常に大きなカルチャーショックと知的刺激を受けているんです。

す。

それからもう一つカルチャーショックだったのは、地元との結び付きが大変密接なことなんです。むしろ有機的に組み込まれているような面のある大学です。上越市の中でも、さまざまな公的役割を担っている。先ほどの櫻井先生のお話に出てきたようなことをですね、みんなやっているわけです。あるいは上越教育大学をでて現場にたっている学校の先生とお会いして、それで様々な社会学の教材作りに関わる。私なんか全然上越のことをまだ知らないままですけども、社会の先生の集まりのところに行つて発表を聴いて、「大学の先生の皆さんどうですか」ということで、コメントするということ、そういう大学です。取り組むことを日常的にやっている、そういう大学です。

学生さんも当然教員志望です。これも全然経験したことのない世界です。教員志望の学生さんというのは、そういうことを必ずしも考えていない人の多い一般の大学の学生さんをずっと見てきた人間からすると、これがまた全然違う。そうしたこともびっくりする。

それで重要なのが、住んでいる環境自体がまったく違うこと。本当に多雪地帯です。上越は世界で一番降水量が多い場所なんだそうです。そこでは子どもたちに冬場に注意することがあるんです。それはどういうことかというところ、「電線に触らないでね」という、分かりますか？ 要するに雪が非常にたくさん積もるからなんです。そういう環境は、全く私の日常生活とその文化にはなかったものです。「ああ、地域変わると全然違うな」と。

そういう中で自然環境もずいぶん違うんですね。きょう、「桜」のお話が出てきまして、実は私は「桜」は好きな方なんです。

れども、皆さんが「桜」といってイメージするのはおそらく葉っぱが先に出なくて、花だけがまず一斉に咲いて、ぱーっと散る、ソメイヨシノですよ。それは例えば上越市でも名所がありません。夜桜見物で有名ですが、高田城のあったところがソメイヨシノの桜の名所です。

ただその一方で、ソメイヨシノ以外の昔から日本にあったといわれる「桜」としては、実はあの辺ヤマザクラがみあたりません。よくみかけるのはヤマザクラに似てるけど、ちよつと違うカスミザクラが咲いています。それから、これはもう「そういうのがあるんだね」という程度の話として聞いてもらえればいいと思うのですが、オクチョウジザクラという、分布のかがざられた「桜」が咲いています。

こういう話をなせるのかということが、この後の話の前振りになっているんですけど、ともかくそういう意味ですね、地域が違うと自然環境から何から何までですね、がらつと変わっているということがあり、それを実感している、ということがあって、いろいろびっくりしていたらあつという間に今に至ってしまったということなんです。

■鎮守の森には、どんな木が生えていたのか

その中で、話をだんだん「伝統」という問題のところに戻していこうと思うのですが、地域社会の歴史、近現代史をやっていますと、実は「伝統」という概念に対する「恐怖症」に陥っていますね。その経験をちよつと一つお話ししておきたいと思えます。

「鎮守の森」、今日の議論にも出てまいりました。鎮守の森ってどんな木が生えているんでしょう。そういつたときに、私が大学に入る前、一九八〇年代ぐらいによく言われていた考え方というのは、あそこにはテカテカしたツバキのような葉の樹木が生えている、シイやカシが生えている、あれは照葉樹林である。常緑広葉樹林でもさしあたりいいですが、あれは、自然にほつぽらかしにしておく、自然というのとはだんだんこう、植生が安定してきて、最終的に特定のタイプの植生、このあたりですと照葉樹林がずっと維持されていく。それは人間が手を加えないようにしてきて、太古の姿がタイムカプセルのように保存されている、こういう話だったんですね。

今でもそれは関東そして関西地方であれば、こんもりしたブルッコリーのような鎮守の森を見かける方、多いと思うので、この話は納得しやすいと思います。私もそのように考えていたわけで、鎮守の森に行くと感じ動しちゃうわけですよ、「ああ、太古の森」って。だから、貧弱な姿の場合もありますが、それでも細々と残っていて、「これをちゃんと人々が伝えてきたんだな」と。私はそう感動してたんです。まさに「感じた」わけですよ、「伝統」を。

それからずつとたちまして、二〇〇六年、最近ですが、ある仕事を頼まれて、多摩のある地域に残された史料を見る機会がありました。それはある神社の、明治時代初めの木が書きあげてある史料です。それぞれなんの木で、どんな大きさの木で、どんな高さの木で、そしてどのあたりに生えているか書いてある。

その史料にでてくる神社、昔、私は実際に見に行ったことが

あった。その時やつぱり照葉樹が割と生えていて、プロッコリーみたいで、「ああ、ここも太古の名残のように残ってるな」ぐらいに思っていたんですね。それで、明治時代初め、百三十年ぐらい前ってことになるのかな、そのぐらい前にそこにどんな木がどんなふうにはえていたのかがわかる史料をみたというわけです。それを見たらですね、松と杉ばかりです。「これ、どうしたもんだらう？」と思いました。照葉樹が生えていてほしいのですが、「雑木」として申し訳程度に書いてあるしかない。そして松や杉は自然にほったらかしのままずっと維持されるようなタイプの木ではない。明らかに人手が恒常的に入って管理されている鎮守の森の姿です。

これは私としてはほんとうにショックだった。これはどうしたことだ、私がああ時に感動した、その感動を返してくれと言いたい気持ちになったんですね。その時に私が最初思ったのは、「いや、これは例外だ、例外に違いない」、こう最初は思ったのです。ところが、この二〇〇六年というのは大変面白い年であります、現在は照葉樹林の鎮守の森が目立っている大阪といった関西を対象として、その過去の姿を復元しようとする研究論文がでて、例えば明治時代とか大正時代の地図で鎮守の森をみると、大部分が地図の記号でとんがり屋根のマークがいっぱい描いてある。つまり針葉樹。

他にもいろんな検証をこの論文はしているのですが、結果としてこの論文は、今は照葉樹林の森となっている場所でも、割と最近まで針葉樹主体の森であるケースがかなりあることをあきらかにした。それも大部分は松らしい。こうした過去の鎮守の森を復元し現在の植生と比較する研究は、これまた二〇〇六

年に長野県の事例でも発表され、おおよそ似たような結果がでてくる。もはや例外どころではなくなってくる。

そうやって考えていくと、なんだかとても複雑な気分になるんですね。私は「歴史屋」ですから、歴史の事実が分かるのはとっても楽しい。けれども、一方で複雑な気持ちになる。ただ、先の関西を対象とした論文で、もうひとつわかってきたことがある。かなり以前から照葉樹林でありつづけた場合も無いわけでもないということも実はあぶりだされてきている。それは現在、照葉樹のなかでもタブノキが生えているところにみられた。ここには、もしかしたら「伝統」というにふさわしい状態が続いているのかもしれない。

こうしたことが、最近になって急に研究で解明されてきたということを経験いたしました。私も先にもうしあげたような史料を用いて、この問題でその後文章を書かせてもらい、いろんなところでも話しました。反発も含めていろんな積極的な反応をいただいた。そんな体験を基にした上で、時間はそんなに残っていないんですけども、三つの報告に対して私で補足していただきたいところを述べた上で、その上で、一つ大きなお話を問題として提出することにしたと思います。

■ 「伝統」への二つのアプローチ

今回の三人の先生のご報告というのは、三人とも「伝統」という問題を、一方である種の感覚の問題、情念の問題、そういった心性の問題と、他方で理解をする、知識を身に付けてより正確にそれを認識していく問題、この二つを絡めるといっ

で、三人の先生方の報告はほぼ一致しているだろうと思うのですね。そこに、いってみれば國學院大學という大学での学問の立脚点を見るという点で共通性がある。

ただその中で、おそらく二つに分けられるだろう。そうですね、太田先生と藤田先生は、お二人とも歴史の専門研究者として著名な先生ですから、研究者としての角度から教育の方へ向かっていく形をとられています。お二人の報告は、やはりその知識、研究の成果をどうやって教育へ反映させていくか、ということにかなり力点を置いたお話だったと思います。

成田先生は、教育というものをまさに実践されてきたプロの目から見ると、そこから専門教育への注文というような形で、どちらかというところ、相対的にだと思えますけれども、感性であるとか、体験という問題の重要性をより強調されて報告されたように思います。このような私のざっとした見取り図があたっているのかどうかは分かりませんが、その理解のもとで、先生方に補足をお願いしたいということをお話ししようと思います。

■「伝統」と地域性、国学と地域性

まずですね、太田先生のご報告に対しては、これは櫻井先生の御講演内容とも絡んでくるのですが、「伝統」をとらえるときの地域性の考え方というものに関して、専門研究の成果がどう生かされて反映できるのかについて説明がもう少しあっていいのではないかと。櫻井先生は先ほど「小さな伝統と大きな伝統」というモデルを出されました。そういう形で地域性を位置づけていらいっしょにやるわけですが、「伝統」をとらえるときに、

特に大学が地域貢献をしていくという問題をからめて考えたときには、やはりそういった地域性をどう評価するかという問題について、特に前近代史での地域性についてのかなり研究が進んだように思いますので、その辺りについてどのような見解をお持ちなのかを聞いてみたい。

それから、藤田先生のご報告に関してはですね、これはもう直球で行きます。国学における地域性の処理の仕方、ですね。国学が日本文化というものを明らかにするというのは分かるのですが、一方で国学者というのは、やはり地域性を非常に持った集団であるというイメージが私にはありまして、そういったときに地域性という問題は、国学が形成される中でどのように位置付けられ、そして今、藤田先生はどうお考えになっただろうかというところを知りたいと思います。

■感性と言葉、感性と専門知識

成田先生のご報告、大変興味深かったですのですが、私はいろんな意味で「伝統恐怖症」だという話をさきほどいたしました。じつは「桜」にもそういうイメージを持つてるんですね。といいますのは、今の学生さんたちが考える「桜」というのは、おそらくソメイヨシノなんです。で、ここで問題になるのは、「桜」という言葉が想起するイメージの問題だと思っております。つまり「桜」自体というよりは、「桜」といったときにどんな感覚をもたらすか。それを考えたとき、「桜」でくくってしまうと特に見えなくなる問題の中心にあるのが、じつはその咲き方です。

ソメイヨシノは私も好きなのですが、ご存じのように花吹雪のように、ぱっと散るわけですね。ぱっと咲いてぱっと散る。それはとても美しいし、大変芸術的なわけです。ですから、例えばですね、戦前の著名な哲学者も、その咲き方に「日本人の心を見る」ってことをやっぱ言うわけですね。ところが、そういう咲き方をする桜は、「桜」としてはきわめて特殊です。このソメイヨシノはいつ出てきたかというところ、今の研究ですと、幕末から明治の初め頃と言われています。「明治五年ごろ云々」という説はどうも怪しいらしいんですけれども。いずれにしても、登場する時期がほぼ特定できるんですね。それ以前はなんの桜が咲いていたかっていうと、それはソメイヨシノでない桜が咲いていた。なおかつ、先ほどお話ししたように、地域によって咲く桜は全然違うんですね。本居宣長が見たのはヤマザクラだと思います。あれは関西に分布の重心がある。種の名前としてのヤマザクラです。けれども、例えば東北地方で見る桜はオヤマザクラですし、新潟でよく見る桜はカスミザクラといったような形ですね、それぞれに個性的な桜が咲いているわけなんですね。なんでこんなことを言うかっていうと、桜を見たときに何か発見する、感性を発見するといったときの、怖さみたいなことがある。

つまり、感性を考えるとときに、言葉ってものをうまく使わないと、実は何かを取り逃がしてしまう、ということがあるのではないか。そうした場合に、私が成田先生に是非お聞きしたいと思うのは、感性と教育をつなげようとしたときの工夫の仕方です。その工夫の仕方に、藤田先生や太田先生のおっしゃっているような話、さきほどの「桜」に関する話は日本近現代史

や社会学等で研究が蓄積されてきた議論ですが、こういった議論が、どういう形で取り込めるんだろう。藤田先生や太田先生のおっしゃっているような、専門知識というものをどういうふうにもうまく反映させて、この感性という問題のところにつなげることができるのか、その工夫をする仕方みたいなものについて、何か補足をしていただけると、というふうに思いました。

■「伝統」という概念の鍛え上げを

それです。最後に全体として、是非この國學院大學の人間開発学部というところで、やっていただきたいなと思うことをお話ししたいと思います。というのは、「伝統」という概念を鍛え上げてほしい、ということなんです。

「伝統」という概念というのは、非常に色々な使われ方をするし、藤田先生も大変その辺りに注意されているようですが、先ほど言ったように「伝統」といったとき、一方で感性感情をめぐる問題と、一方で理解、つまり昔のことをよく知る、そして伝統が伝統であることをちゃんと認識していく、それによって伝統を尊重する気持ちがさらに深まっていく、おそらくこういう運動学的対応を考えてらっしゃるのかなと思うんですね。

ただ、そうした場合難しいのが、この二つの問題は、実はそんなに予定調和的につながってないだろうということなんです。というのは、これは私の研究の最後のほうに戻ってくるんですけど、私は、鎮守の森を見たときに、照葉樹林があると、「ああ、これは極相林的だから、ああこれは原生林の名残だろう」で終わっちゃったんですね。どういうことかっていうと、「伝統」

を感じるっていうときに、そこで満足してしまつてそれ以上は思考停止をする作用が、「伝統」という言葉にはじつはある。特に「伝統を感じる」「実感する」といったときに、思考停止が起きる可能性が極めて高い。

その一方で「伝統」を明らかにしようとする、そこに「伝統」とされてきたものの切断面が見えてきたりする、といったようなことがあつて、この二つをどうつなげて工夫していくかということが、「伝統」という概念をブラッシュアップしていくときに、非常に重要になるところなんじゃないか。この辺りの理論的な詰めというのは、これは皇學館大学もそうですし、國學院大学といった大学の問題意識の下でこそ、洗練され得るテーマだと思うんですね。うまく表現できてないんですけれども、その辺りにについても、勉強させていただければと思います。まとまりのない話で大変失礼いたしました。

